関　正夫先生ご退官に際して

広島大学 大学教育研究センター長
有　本　　章

広島大学 大学教育研究センターは，昭和47年５月に，その前身の大学問題調査室を基礎にして，全国最初の高等教育研究機関として制度化されて以来，足掛け23年間にわたる活動を展開してきました。お陰さまで，多くの研究者や関係者の方々から絶大なご支援とご鞭撻を賜り，今日の発展を招来することができました。

関正夫先生は，そのような発展過程において中心的存在として指導性を発揮してこられましたことは周知の通りでありますが，本年３月末をもって退官されることになりました。現在は新キャンパスへの移転を機に高等教育研究の充実が期待され，先生の豊かな経験や学識が一層必要とされる時期だけに，当センターにとりまして大きな損失であり，誠に残念というほかありません。

関先生は昭和32年に九州大学理学部物理学科を卒業され，昭和33年に九州大学工学部に応用原子核物理学の助手として赴任され，昭和41年に広島大学工学部助教授（応用物理学担当）に着任されたのち，昭和48年に大学教育研究センター教授（大学教育内容・方法論担当）に就任されました。広島大学には29年間在職されましたが，そのうち22年間は大学教育研究センター教授として在職されました。しかも，全学改革委員会委員として当センター設立に関係され，併任研究員として活動に参画されておりますので，学究生活の大半を当センターと共に歩まれたといっても過言ではありません。

その間，高等教育研究や大学改革の推進という設立目的の精神を醸成することに努められ，センターの発展に終始尽力されました。昭和62年から第７代センター長としてＯＥＣＤ第２回高等教育国際セミナー開催，年次研究員集会開催，センター整備充実等々に多大の貢献をされましたことは，今も記憶に新しいところであります。

先生は，昭和40年に理学博士号（九州大学）を授与されたことに窺えますように，最初は物理学研究に従事されましたが，その後「大学紛争」の時代に大学改革委員会委員として大学改革の仕事に着手されたのを契機に，理工系分野を中心にした大学教育研究に取り組まれることになり，新しい分野の開拓に邁進されました。その意味では，大学改革は先生のアカデミック・キャリアの一大転機を迫るものとなり，その後のライフワークに直結する主題となったものと拝察されます。特に，先生のご研究は，教育学や社会学など社会科学の領域で行われた大学教育研究ではなく，自然科学研究を深められた立場に立脚しつつ，大学教育研究を行われたところにあります。重層的な視点と多くの刺激的な論点を提示されました。

こうして，高等教育や大学研究という，日本では未発達の領域に踏み込まれるとともに，関連の学会活動に携わられることになりました。例えば，日本物理学会，日本物理教育学会，日本教育学会，日本工業教育協会，日本教育社会学会，大学史研究会，一般教育学会，研究・技術・計画学会，等において貴重な足跡を残されました。一般教育学会では常任理事として，研究・技術・計画学会

では参与として指導的な役割を果たされたのをはじめ，大学基準協会では同協会あり方小委員会委員として，ＩＤＥ民主教育協会中国・四国支部では常任理事として重要な役割を果たしてこられました。

これらの活動を通じて，とりわけご著書『日本の大学教育改革―現状・歴史・展望』(昭和63年刊，玉川大学出版部)，『日本高等教育的改革動向』(陳武元訳，平成３年刊，廈門大学出版社)，『21世紀の大学像』(平成7年刊，玉川大学出版部）等，数多くの業績を発表されることによって，内外の高等教育研究の発展に貢献されました。

教育面では，昭和61年から広島大学社会科学研究科国際社会論専攻において「比較高等教育研究」（当初は「比較大学研究」と呼称）が創設されたのに伴い，比較大学教育論を講ぜられ，研究者や専門家の養成に携わってこられました。

平成６年には日本工業教育協会から，業績賞が授与され，先生の斯界における長年の功績が讃えられました。

先生のご活動は研究や教育の側面にとどまらず，大学の管理運営や大学改革においても貢献されました。特に，社会科学研究科運営委員をはじめ各種委員として重責を果たされましたが，とりわけ大学改革推進に鋭意取り組まれ，広島大学の改革の基本的策定とかかわる全学改革委員会，21世紀将来構想検討委員会，自己点検・評価特別委員会，等において重要な役割を担われました。

このように，先生は各方面の活動を通じて，数々の業績をあげてこられ，そこでの卓越した学識，指導力，包容力によって，学内や国内はもとより国際的にも計り知れない影響力を持たれたことは重ねて申すまでもありません。

以上，十分意を尽くせませんが，先生のご功績を讃え，先生より賜りましたご指導やご尽力に対して，大学教育研究センターを代表して深く感謝の意を表する次第であります。本論集は，このような感謝の気持ちを込めて，ご退官記念号と銘打って先生に捧げることを企図したものであります。

末筆になりましたが，先生の今後のご健康とご多幸を心から祈念申し上げ，ご挨拶に代えさせていただきたいと存じます。

平成７年２月